

出典：徐愛ほか『伝習録』 / オリジナル問題

書き下し文

先生曰く、「学を為すの大病は名を好むに在り」と。侃曰く、「前歳より自ら謂へらく、此の病已に軽しと。比来精察するに、乃ち全く未しきを知る。豈に必ずしも外を務めて人の為にするのみならんや。只だ誉を聞いて喜び、毀を聞いて悶ゆるも、即ち是れ此の病より発し来るならん」と。曰く、「最も是なり。名は実と対す。実を務むるの心重きこと一分なれば、則ち名を務むるの心軽きこと一分なり。全て是れ実を務むるの心なれば、即ち全て名を務むるの心無し。若し実を務むるの心、饑の食を求め、渴の飲を求むるのごとくならば、安くんぞ更に工夫の名を好む有るを得んや」と。又曰く、「『世を没つて名の称せられざるを疾む』の称の字は去声に読む。亦た『声聞の情に過ぐるは、君子之を恥づ』の意なり。実の名に称はざるは、生けるときは猶ほ補ふべきも、没すれば則ち及ぶ無し。『四十五にして聞無き』は、是れ道を聞かざるにして、声聞無きに非ざるなり。孔子云ふ、『是れ聞なり、達に非ざるなり』と。安くんぞ肯へて此を以て人に望まんや」と。

現代語訳

（王陽明）先生のおっしゃるには、「学問をする上で大きな悪癖は、名声を好むことにある」と。（それを聞いて同門の薛）侃が言うには、「（私は）先年から自分ではこの悪癖は軽くなったと思っておりました。（しかし）近ごろよくよく考えてみますと、そのうちやつと、まだまだでだめだということに気付きました。（名声を求める病は）どうして必ずしも外に向かつて意識して他人（に自分の力を誇示すること）のために（学問を）することだけででしょうか（いえそれだけではありません）。（自分の内に向かう気持ちであっても）ひたすら（自分が人に）誉められるのを聞いて喜んだり、非難されるのを聞いて思い悩んだりするのも、つまりはこの悪癖から起こっ

てくるようです」と。(それを聞いて先生が)おっしゃるには、「全くそのとおりだ。名声(を求める心)は実質(を求める心)と対立するものである。(だから)実質に力を入れる気持ちが一定の分だけ重ければ、名声に力を入れる気持ちはその分だけ軽くなる。全て実質に力を入れる気持ちであれば、とりもなおさず名声に力を入れる気持ちは全く消えてしまう。もしも実質に力を入れる気持ちが、飢えた者が食べものを欲しがり、渴いた者が飲みものを欲しがるよう(に切実)であるならば、どうしてその上に精神修養(を求める学問)の道で名声を好み求めることがありえようか(いや、そんな余裕はないはずだ。名声を求める分だけ実質を求める修養が妨げられるから、名声を好むことは実に病害なのだ)」と。そしてさらに(先生がこうも)おっしゃるには、「『論語』の『君子は自分が世を去つて後に(その)名の称せられないのを嫌う』(という文言)の『称』の字は、(平声で読んで「名を誉め称える」の意味にとる説があるが、本当は)去声で読む(のがよい、つまり「名声が実質にかなう」の意味にとるべきであつて、決して『死後に自分の名が人から言われ(なくな)る(のを嫌う)』というような名誉心を言ったものではない)。これはまた、『孟子』にある『名声や評判が(当人の)実情以上に高まることを、君子は恥とする』(という文言)の意味するところ(と同じ)である。実質が(名声に)かなわないことは、生きているうちならまだ改めることもできるが、死んでからでは手の打ちようがない(からだ)。(さらにまた、『論語』の『四十歳や五十歳になつても《聞》がない(ような人は畏れるに足りない)』(という文言の《聞》の字)も、つまりは「道を聞いていない」(という意味)であつて、「名が聞こえない」(ということ)ではないのである。孔子は(弟子の子張に)『ただ有名なだけの《聞》であつて、(修養を積んで自然に徳が知られるようになった)《達》ではない(のでは不十分だ)』と言っている。(それほどなのだから、孔子が)どうして名声を好むことなど(学問で自己を修養しようとする)人に対して求めるはずがあるうか(そんなはずがないのだ)と。

\*注にある「四五十而無聞焉、斯亦不足畏也已。」

書き下し文……「四五十にして聞く無きは、斯れ亦た畏るるに足らざるのみ。」

現代語訳……「四十歳、五十歳になつても(道を)聞くことのない(ために道理を知らないような)者は、結局のところ畏れる必要はないのである。」

- (一) 自己の学識を他人に認めさせようと努力すること。
- (二) 名声を求める心と実力を求める心とは対立するから、切実に実力を望めば名声を望む余裕はなくなるということ。
- (三) 世間での名声や評判が当人の実情に対して過分であること。
- (四) 孔子が学を志す人に名声の希求を期待するはずがない。

## 現代語訳

下野の国(＝現・栃木県)の那須野の野原で日が沈んだ。(手下の)小猿と月夜とが(次のように)言う。「この野原は道が枝分かれしていて、暗い夜にゃあ踏み迷うことが、以前にもありやした。(親分は)ここで少しの間お休みくだせえ。(あつしどもが道の)様子を見てきやしよう」と(言っ)て、走ってゆく。殺生石と(いつ)て、毒気があるという石を開う垣根が崩れている(ところ)で、(樊噲は薪に)火を点け(焚き火を)おこしてじっとしている。(そこへ)僧侶が一人やってきた。(樊噲が坐り込んでいるのに気付かないはずもないのに、樊噲には)目もくれずに(まっすぐに顔を上げて)通り過ぎる態度が(樊噲にしてみれば)気に食わない。(そこで樊噲が)「坊さんよう、何か持っていたら(俺に)食わせろ。路銀を持っていたら置いていけ。ただ何もよこさねえなら通さねえぜ」と言う。(するとその)僧侶は立ち止まって、「ここに金が一分ある。(これをそなたに)やろう。食べ物を持っておらん」と(言っ)て、むきだしのままの金を樊噲の手に渡して、振り返りもせず立ち去(ろうとす)る。(樊噲はその僧侶の後ろ姿に)「この先で若い者どもが二人立っているはずだ。(あんたにそいつらが何か言ってきたら)『樊噲に会って金をやった』と(言っ)て通れよ」と言う。(僧侶は)「わかった」と答えて、(何事もなかったかのように)足取りも落ち着いて歩いていった。(ところが)半刻にもまだならぬだろうと思う(くらいのわずかな時間のうち)に、僧侶は引き返してきて、「樊噲どのは(まだこのあたりに)おいでか。拙僧は、仏道に志したはじめ(のとき)以来、嘘をつかない(できた)のに、(先ほどそなたに声を掛けられたときに)不意に何となく惜しい気がして、もう一分(持っていたのを手許に)残してある(のは、我ながら)、気持ちが悪さっぱりせぬ。こ(の一分)もやるぞ」と(言っ)て、取り(出して樊噲に)与える。(その金を)手の上に載せたところ、(樊噲は)どうにも気持ちが冷え冷えとしてきて、「こんなに正直な坊さんがいる(もんだ)。(それにひきかえこの)俺は、親と兄を殺し、多くの人を傷つけ、盗みを働いて生きているのは、嘆かわしい、情けない」と、しきりに思うようになって、僧侶に向かって、「(あなたさまの)御人徳で(私のひねくれた)考えも改まり、これからは(あなたさまの)お弟子となって、仏道修行の人生に入ろうと思えます」と言う。僧侶は(その言葉に)心を動かして、「(それは)非常に結構なことだ。(それでは拙僧について)来い」と(言っ)て、(二人)連れ立って行く。(そのうちに)小猿と月夜が、出

てきた。(樊噲は)「おまえらはどこへでも行って、どうとでもなるがいい。俺はこの坊さまの弟子になって修行しよう(と決めた)。襟元の虱(のように俺にくっついてきたつまらない者ども)よ、(いつまでも俺の)身近にまとわりつくな。もう二度と顔を見る気はないぜ」と(言っ)て、(もとの手下に最後の)一瞥をくれてやって別れてゆく。(僧侶は)「それでよい。修行のために)役に立たない子分たちは振り捨てろよ。(そなたのこれまでの)罪の(仏への)告白は歩きながら聞こう」と(言っ)て、先に歩いていった。

**解答**

(一) アⅡ私たちがこの先の道の様子を見てこよう

イⅡもしおまえが何も渡さないならこは通さないつもりだ

(二) 俺の手下がおまえの行く手を阻んだら、「私はあなたがたの親分の樊噲に会って金を渡した」と言って通してもらえ

(三) 追い剥ぎに嘘をついたことまで反省する僧侶の正直さにふれ、悪業を重ねてきた自分の罪深さに気付いて発心したから。

(四) 自分に付き従って悪事を働いてきた者たちは、仏道修行の妨げとなるので、もう自分にはつきまとわせないという意味。

**解説**

(一) アⅡ「あない」は、ここでは「情況・様子」などといった意味。「みてこむ」は「見て来む」で、直前に「休みたまへ」と他者への呼び掛けには敬語表現があるので、ここは自称主語(Ⅱ一人称主語)の省略された表現とみて、「む」は《意志》の助動詞と考える。ただし、ここでの一人称は手下の二人である。あとにも「若き者ら二人」とある。したがって、主語は複数形で補うことになる。あとは、何の情況・様子を見ようというのか補えばよい。これは、この一連の会話部分が「夜道の迷いやすさ」を述べたものだから、「行く手の道」であることがわかる表現ならよい。なお、傍線部は会話表現で、手下が親分に話し掛けるところだから、原文にない丁寧語を補うことも許されるだろう。

イⅡ「むなしくは」は形容詞本活用連用形+係助詞で、《順接仮定条件》を示す。「じ」は《打消推量》または《打消意志》の助動

詞だが、直前の「通す」に注目すると、盗賊である樊噲がたまたま通りかかった僧侶に話し掛けていたのだから、これは話し手である樊噲の行為である。したがって、「通さじ」は主語が自称（＝一人称）であることから《打消意志》の表現となり、その《仮定条件》が「むなしくは」と表現されたことになる。「空し」とは「何もない様子」を言う言葉だから、この状況で何もないとはどういうことか考えて具体的に表現する。これは、傍線部の直前に「金品を出せ」と言っていることから、「金品を何も出さなければ」の意味であることがわかる。「出す・出さない」の主語も補っておくべきだ。

(二) 「人物関係が明らかになるように」とわざわざ断つての設問だから、登場人物四人の関係を明確に表現することを求めている。「物おくりし」の主語は僧侶だが、これが二重かぎ括弧に括られていることから、実際にその行為をした僧侶の言葉としては「私」と言い換える。「過ぎよ」の主語も僧侶だが、これは樊噲が僧侶に向かって発した命令形だから、主語は「おまえ」となる。また「過ぐ」はここでは傍線部直前の「ゆく先にて若き者ら二人立つべし」を受けているから、「二人の若者の前を」過ぎることに何らかの形で触れておきたい。この二人はそもそも樊噲の手下なのだから、「その前を通る」のに「樊噲に金を渡した」ことを断らなければならぬのは、手下の二人が樊噲と同じように僧侶を足止めして金品を脅し取ろうとすることを予期していることだろう。そのことを始めに述べておけばよい。さらに、二人の若者と樊噲の関係を、若者に対する言葉の部分でも確認すれば万全である。

なお、解答では追い剥ぎ強盗の台詞であることを考慮して乱暴な表現にしてあるが、人物関係の把握・表現が間違っていないければ、「俺」を「私」、「おまえ」を「あなた」などとしても構わないだろう。はじめに掲げた通釈としての現代語訳では、会話部分には人物に相応の言葉遣いをあててみたが、入試問題の答案としての現代語訳では、語学的理解を打ち出すことが優先される。解答のような表現で充分である。

(三) 「心寒し」とは心に冷たいものが走ることに、気持ち寒々とすることを言う。心情表現だから、その前後にその人物の言葉や思考内容があれば、当然そこにその心情が反映されることになる。傍線部の直後に樊噲の考えたことがあるので、ここを見ると、心情語として「あさましあさまし」が見える。これは一般に驚き呆れるほどである様子を言うが、その理由は、傍線部に続いて僧侶と自分を対比していることから、僧侶と自分との違いに気付いて呆れていることになる。僧侶については「直き法師」と言っている。「直し」は「素直である・正直である」といった意味だが、ここでこの僧侶の行動の「素直・正直」な点を考えると、嘘を吐いたことを自ら

告白しに帰ってきたことであろう。しかも、その相手は僧侶から金を奪い取った盗賊なのである。これに対して「我」すなわち樊噲自身は、親兄弟や他人を手に掛け、強盗を生きる手段にしていることに、自分で思い当たっているのである。そしてこのことを「あさましあさまし」と感じているということは、樊噲はここで自分の過去の悪業を振り返って反省していることになる。

さて、設問の中心は「心さむく」になった理由を問うことにある。樊噲の反省の契機が、どこまでも仏道に誠実であろうとする僧侶の正直さにあり、すぐあとに自ら「行ひの道に入らむ」と言っていることを考えあわせると、樊噲の心にはこのとき発心が兆していることがわかるだろう。したがって、仏道に目の向いた状態で自分の過去を振り返ることで、その罪深さに慄いたのが、「心さむくな」ったことの直接の原因であると考えられる。このことに触れておけばよい。

(四) 「襟もとの虱」とは、ここまでまったく触れられていない虫の話をしきなり持ち出し出していることから、譬喩表現であると判断する。「虱」とは皆が迷惑に思う小さな虫であり、また「襟もと」という表現から、だれかにくっついていてことを暗示している。この文章で「だれかにくっついていて迷惑な小者」とは樊噲の手下しかない。「身につくまじ」に関しては、「つく」が四段活用で《自動詞》、下二段活用で《他動詞》となるが、「まじ」は終止形・ラ変型連体形接続なので、接続関係だけでは識別できない。「虱」に格助詞が接続していればわかりやすいが、ここではそれもない。しかし「まじ」が多義語であることを考慮して、文脈に適合する組合せを考えれば、「虱」を《呼び掛け》、「まじ」を《禁止》と見て、傍線部全体で「虱よ、つくな」とするか、または「虱」を《客語》(＝直接目的語)、「まじ」を《打消意志》と見て、傍線部全体で「虱を、つけることはしないぞ」とするということ、ふたつの解釈が可能であり、このふたつは結果的には同じことを言っていることになる(だからこそ、この設問は「現代語訳」ではなく「内容説明」を要求しているのだとも考えられる)。

実際の答案作成に際しては、「内容説明」の問題であるから、直接的に「虱」と書くのではなく、その譬喩の意味するところを説明する必要がある。ここでは、「襟もと」からだれと一緒だったのか、また「虱」から悪いイメージのもとになることを、それぞれ明示するとよい。また、「身につくまじ」は「自分にはつきまとわせない」という意味が出ていけばよい。さらに、これまで一緒だったのに袂を分かとうとするのだから、その理由も盛り込みたい。せっかく発心しておきながら手下を見捨てるのは不人情にも思えるが、直後で僧侶が「無益の子供ら(ここでは「子分たち」)は捨てよかし」と言っているので、「無益」がその理由である。一緒に悪事を働いた者が身近にいるのでは、仏道に帰依する心が乱されるのではないかと恐れての台詞であることがわかる。これを簡単に盛

り込むことで、二行分の素材が確保される。